

主体的活動を通して古典と触れ合う

—専門高校三年生の選択授業—

三 島 紀 子

一 はじめに

浜田商業高校は島根県西部地方（石見地方）唯一の県立商業高校であり、約六百名の生徒が浜田商港を見下ろす丘の上の校舎でのんびりと学校生活を送っている。専門高校ではあるが、不況の影響もあってか就職希望者が全体のほぼ五十パーセントにまで減少し、進学率が高くなってきている。進学希望者の進学先は、半数以上が専門学校、残りが短大、ごくわずかの生徒が四年制大学であり、ほぼ全員が推薦入試で進学先を決定してゆく。

平成十年度の新入生を対象にした「入学動機調査」によると、本校への入学の動機は、「友人のほとんどが進学するから」「何となく高校に行きたくて」「高校ぐらい出ていないといけない時代だから」などが多く、学習に対する積極的な姿勢はあまり見られない。更に、入学後、自らの学習意欲を喚起するような動機を見つけたすこともなかなか困難なようだ。就職希望者と専門学校進学希望者が多いこと、また、資格取得に対する意欲は高いのだが（前述の調査では「技能を身につけたり伸ばしたりしたい」「就職に有利」などと答えた生徒も多かった）普通教科は資格取得と

は関連が薄いことから、特に普通教科に対する学習意欲が育たないのである。従って、学習意欲を育てるとともに主体的で活発な授業を何とか創り出していくことが、私にとって常に一番の関心事となっている。

二 国際経済科について

本校には商業科・国際経済科・情報処理科・情報科学科の四学科が設置されているが、国際経済科は平成七年度に新設された本校で一番若い学科である。国際経済科では、「国際感覚を身につけた人材の育成」の目標の下に外国語（英語・中国語・韓国語）が、また、進学への対応という点から簿記会計が、それぞれ軸の科目とされている。

国語に関しても多学科とは別課程になっており、一年時に「国語Ⅰ」（3単位）、二年時に「国語Ⅱ」（3単位）を履修した後、三年時には全員が「現代文」（3単位）を履修する一方で、選択科目として「古典Ⅰ」（2単位）が用意されている。国際人になるためにはまず自国の文化を、ということ、日本の文化を学ぶ

古典の授業が導入されたのである（国際経済科以外は、一・二年時「国語Ⅰ」（3単位）、三年時「国語Ⅱ」（3単位））。

国際経済科の完成年度であった昨年度（平成九年度、本校で初めて取り入れられた「古典Ⅰ」の授業を、偶然受け持つことになった。彼らとは初めての関わりであったが、入学当初からさまざまな問題を抱えたクラスであるという話は耳にしていた。国際経済科の一期生ということで学校からの期待は大きかったが、その実態としては、科の特色が今一つ明確ではなく、また生徒達の中にも目的意識の薄い者が多かったため、学習面・生活面とも真剣に取り組めない者が非常に目立っていたのだ。そんな中で、選択授業のため少人数であるということも生かして、生徒達が主体的に取り組むことのできる活発な授業に、と願いながら、一年間週二時間の授業を展開してきた。

三 授業の実際

(1) 対象 三年国際経済科（一期生）古典Ⅰ選択者八名

「古典Ⅰ」「数学Ⅰ」「生物Ⅱ」の中で、平成九年度は全三十四名の内八名が「古典Ⅰ」を選択した。男子一名（Y）、女子七名（I・K・S・T・N・M・E）という内訳だが、そのうち、学習に対して特に意欲的な生徒が四名、良くも悪くもない生徒が二名、特に意欲のない生徒が二名であると聞かされた。第一回目の授業の際、選択した八名に選択の動機を尋ねてみると、

「他教科に比べ、古典がマシだった」：四名

「数学・生物は嫌いである」：三名

「国際人になるために日本のことを知りたい。」

昔のことを知りたい」：一名

という答えが返ってきた。国際経済科にとつての古典の意義をきちんと理解し、それを動機としてもっていた生徒は一名であった。

(2) 科目名・単元名 古典Ⅰ「道長周辺の文学に触れる」

彼らが一・二年時に「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」の中で学習した古典教材は、以下の通りである。

「児のそら寝」（宇治拾遺物語）

「なよ竹のかぐや姫」（竹取物語）

「盗人にあひてのがるること」（今昔物語集）

「神無月のころ」（ある人弓射ることを習ふに）（徒然草）

「ゆく川の流れ」（方丈記）

「万葉集」「古今集」「新古今集」より数首ずつ

「旅立ち」（おくのほそ道）

「漢文入門」「格言」「矛盾」「虎の威を借る」

「唐詩」六首

「論語」五編

これらをながめてみると、特に古文について平安時代の文学史上重要な文章をほとんど扱っていないという、バランスの悪さに気づく。従ってそれを補う形で平安女流文学を中心に単元を構成しようと考えた。

(3) 単元の学習目標

- ①自分の力で古典に触れ、古典に親しみを感じる。
- ②作者や登場人物の考え方に迫り、それに対して自分の意見を持つ。

③グループ活動を通して、意見をはっきりと伝え尊重し合う態度を身につける。

1 「授業は教師に与えられるもの」という受動的な態度ではなく、「自分たちの活動が重要だ」という積極的な態度を育てたいと考えた。古典学習は生徒にとって既知の部分が少なく、また、既知の知識を応用しにくい面も多く持っているものである。(特に本校では文語文法についての学習はほとんど行っていない)、自分自身の授業を振り返るといつも教師主導型の退屈なものであった。そういう反省もあって、生徒が自分の力で文章を読み進めることを授業の軸にしたかった。

2 生徒によって学力や取り組みの態度にばらつきがあるが、それも生徒達自身の問題として捉えてほしいと考え、グループを中心に活動させた。

3 理解活動が中心となりがちな古典学習に、表現活動を多く取り入れたいと考えた。筆記による表現は、教材本文を読み進める段階で辞書を引きながら現代語訳を作り上げる過程で言葉と言葉をどうつなぐかを考えることが狙いであり、また、音声言語による表現は自主的活動の重要性を再確認すること、「古典は座学、おもしろくない」という固定観念を

打ち破ることが狙いであった。具体的には本文の音読だけではなく自ら思考した内容を発表する場として、設けていきたいと考えた。

4 社会に出、あるいは進学していく中で、この授業が古典を再び紐解ききっかけになつてくれればと考えた。古典は決して単なる科目名ではなく現代の言葉や文章につながる財産である、という考えを植え付けたかった。そして、その中には当然人々の喜怒哀楽が表現されているわけで、それを共感していくことはおもしろいことであるということを知ってもらいたかった。

5 「数学Ⅰ」「生物Ⅰ」とのモザイク授業であるため、使用教室は空き教室であった。が、「授業Ⅱおもしろくないもの、かたくなるしいもの」という観念をうちやぶるため、黒板に向かって机を並べる普通の形態はやめ、机を円形に並べてお互いの顔を見合わせるような、座談会風の設定した。また、新聞作り(過程Ⅳ・Ⅴ)及び「紫式部日記」(過程Ⅵ)の間は図書館で自由な雰囲気の中、のびのびと過ごすことにした。古典に親しみを持ってもらうための演出である。

(4) 学習過程

I 「大鏡」「雲林院にて」を読む(九時間)

音読を繰り返した後、傍注プリントを使用し古語辞典で意味を調べながら現代語訳を中心に活動をさせ、一時間につき一五分程度一斉授業を行った。

古語辞典を使用するのは初めてという生徒がほとんどだったので、用言の終止形や助動詞の意味の重要性にも触れた。現代語訳の作業ではお互いに話し合いながら全員非常に熱心に取り組んだ。

II 「大鏡」「東三条院と道長」を読む（七時間）

音読を繰り返した後、前教材よりやや傍注を少なめにしたプリントを使用し、人間関係に興味を持たせることを中心に授業を展開した。また、敬語・係り結び・助動詞の意味など簡単な文法学習を二時間程度入れた。

歴史上の人物として誰もがよく知っている藤原道長にまつわる話であり、興味を持って取り組むことができた。現代語訳は後半部分に傍注を一切付けなかったための戸惑いはあったものの、音読のリズムから言葉のまとまりを感じ取り、こまめに辞書を引いていた。

III 「枕草子」「にくきもの」を読む（三時間）

① 2グループに分かれ、本文の前半・後半をそれぞれ担当し協力しながら読み解かせた。グループは個々の学力や意欲を考慮し、お互いに協力しあい補いあえるよう、こちらで考えて決めた（二時間）。

② その成果を発表しあった。他グループの発表を聞きながら分りづらい表現などについて質疑応答をした（一時間）。
四人ずつのグループにしたが、どちらのグループでも意欲の続かない生徒はすぐに何もしなくなり、残りの三人だけが取り組む

という形になりかけたため、途中から一人一人に役割を分担させた。その結果全員が平等に取り組むことはできたが、②の質疑応答はあまり活発なものにならず、自分の分担以外の内容についてはごく浅い理解のままになってしまった。

IV 「枕草子」類従的章段を読む（九時間）：図書館

① 類従的章段から自分の読みたいものを一人三段選ぶ（一時間）。

② 二人組になり一グループが五〜六段を読み進める（八時間）。

〈資料①〉

分らないことは図書館のあらゆる本を使って調べながら明らかにするよう指示した。また、いざれ新聞という形にまとめて発表することを意識させた。グループは過程Ⅲ同様、こちらで考えて決めた。

〈K・Nグループ〉

「とりどころなきもの」「くるしげなるもの」「うらやましげなるもの」「おほきにてよきもの」「みじかくて ありぬべきもの」「

「きらきらしきもの」

〈S・Tグループ〉

「したりがほなるもの」「さはがしきもの」「せめておそろしきもの」「たのもしきもの」「うれしきもの」

〈M・Eグループ〉

「すぎにしかた恋しきもの」「ありがたきもの」「つれづれなるもの」「むねつづるもの」「うつくしきもの」「見るにことなることなきもの」の文字にかきてことごとしきもの」

へ・Yグループ

「みぐるしきもの」「絵にかきおとりするもの・かきまざりするもの」「はしたなきもの」「いやしげなるもの」「人の家につきづきしもの」「さらさらしきもの」

「くもの」という見出しの章段を全て挙げ意味も明らかにならぬまま現代語の感覚で「おもしろそう・好きだ」と思うものを選ばせた。当然本文の内容についての情報もなく、従って自分が「おもしろそう」と思って選んだ本文が非常に長い話であることもあり、長い本文ばかりが当たってしまったグループは他のグループと交換させ、グループ間での不公平がないようにした。現代と共通している感覚と、現代とは全く異なる感覚とに触れて、生徒たちはそのリアリティのある表現に関心したり、また現代では消えてしまった物や考え方に興味を持つたりすることができた。非常に苦労して内容を理解していたが、「発表しなければならぬ」という意識もあり、粘り強く取り組んでいた。

V 「ものづくし新聞」を作る（八時間）：図書館

- ① IVで読み進めてきた本文の内容をまとめ、企画書を作る（五時間）。
 - ② 企画書を元に新聞を作る（三時間）。〈資料②③④〉
 - ③ 発表のための資料を作る（〇・五時間）。〈資料⑤〉
 - ④ 発表。各自で評価・感想を書く。また、新聞の学習を終えた感想を書く（一・五時間）。〈資料⑥〉
- 生徒たちが読んできた様々な話題を様々な形で多く盛り込める

形式で、また、生徒が身近に親しんでいる形式で、ということを考え、表現の方法として新聞作りをすることにした。また「読む」「書く」だけではなく「聞く」「話す」学習を、と考え発表会を催した。意見発表の場としたかったのだが、自分の意見をはっきりと持ち、それを形にして表現するまでにはいたらなかった。もつと書き手（話し手）の主観が表現しやすい形式がふさわしかった。

VI 「紫式部日記」を読む（四時間）：図書館

- ① 辞書を引きながら読み進める（二時間）。
 - ② 座談会「清少納言と紫式部」を開く（一時間）。
 - ③ まとめ。学習プリントに考えを書き込む（一時間）。
- 「真名かきちらしてはべる」という清少納言の様子から次時につなげた。〈資料⑦⑧〉

VII 「枕草子」「雪のいと高う降りたるを」を読む（二時間）

前時までの流れから漢文の学習につなげるためこの教材を選んだ。

VIII 「史記」「四面楚歌」を読む（四時間）

音読を繰り返し難解な表現にはこちらから意味を与えた。

(Sさんの評価表)

発表グループメンバー | K & N |

	良	一	一	良
【準備段階】				
本文をよく読み込んでいるか	5	④	3	2 / 1
【新聞版面】				
見出しに興味をひかれるか	5	②	3	2 / 1
本文の内容をよく生かしているか	5	④	3	2 / 1
アイデアが新鮮であるか	5	④	③	2 / 1
各議題がバラエティーに富んでいるか	5	④	③	2 / 1
記事内容の深さ	5	④	②	2 / 1
おもしろさ	5	④	②	2 / 1
レイアウトに工夫があるか	5	④	③	2 / 1
協力の跡が見られるか	5	④	3	2 / 1
【発表態度】				
聞き手を意識した発表ができているか	5	④	③	2 / 1

発表グループメンバー | E & M |

	良	一	一	良
【準備段階】				
本文をよく読み込んでいるか	⑤	④	3	2 / 1
【新聞版面】				
見出しに興味をひかれるか	⑤	④	3	2 / 1
本文の内容をよく生かしているか	⑤	④	3	2 / 1
アイデアが新鮮であるか	⑤	④	3	2 / 1
各議題がバラエティーに富んでいるか	⑤	④	3	2 / 1
記事内容の深さ	⑥	④	3	2 / 1
おもしろさ	⑥	④	3	2 / 1
レイアウトに工夫があるか	5	④	3	2 / 1
協力の跡が見られるか	5	④	3	2 / 1
【発表態度】				
聞き手を意識した発表ができているか	⑤	④	3	2 / 1

読者 記者

「フワフワの見出しは興味を引いたけど、記事が読者向きだったのが残念だった。よくは読んでくれたけど、レポートも書いてるので、深く掘り下げてくれて、全部一と一通り抜けました。」

読者に入った記事

読者 記者

おもしろい！一番清々納言の性格や、当時の生活が分かる新聞だった。読者も分かりやすい。発表もスムーズでよかったです。

読者に入った記事 納言の部屋

発表グループメンバー | S & T |

	良	一	一	良
【準備段階】				
本文をよく読み込んでいるか	⑥	④	3	2 / 1
【新聞版面】				
見出しに興味をひかれるか	⑤	④	3	2 / 1
本文の内容をよく生かしているか	⑤	④	3	2 / 1
アイデアが新鮮であるか	⑤	④	3	2 / 1
各議題がバラエティーに富んでいるか	⑥	④	3	2 / 1
記事内容の深さ	⑥	④	3	2 / 1
おもしろさ	⑥	④	3	2 / 1
レイアウトに工夫があるか	⑥	④	3	2 / 1
協力の跡が見られるか	⑥	④	3	2 / 1
【発表態度】				
聞き手を意識した発表ができているか	⑥	④	3	2 / 1

発表グループメンバー | Y & I |

	良	一	一	良
【準備段階】				
本文をよく読み込んでいるか	③	④	3	2 / 1
【新聞版面】				
見出しに興味をひかれるか	5	④	②	2 / 1
本文の内容をよく生かしているか	⑤	④	3	2 / 1
アイデアが新鮮であるか	5	④	②	2 / 1
各議題がバラエティーに富んでいるか	5	④	3	2 / 1
記事内容の深さ	⑥	④	3	2 / 1
おもしろさ	5	④	3	2 / 1
レイアウトに工夫があるか	5	④	3	② / 1
協力の跡が見られるか	5	④	3	② / 1
【発表態度】				
聞き手を意識した発表ができているか	⑤	④	3	2 / 1

読者 記者

遅くまでお疲れさまでした。発表の仕方も毎日聞いたので、役割が良かったと思います。T君の心がけは嬉しかったです。

読者に入った記事

読者 記者

発表がとてもおもしろかった。Y君の役割は上手すぎておもしろかった。内容も深く、スライドもとても見やすい漢字や図表が多かったです。

読者に入った記事 南沙新聞 2011.9.25 -!

四 考察と課題

(1) 八名での授業とはいうものの、欠席者がほとんど毎回あり、実際は五〜七名での授業となった。が、全体を通じて生徒たちはみな意欲的で前評判とは全く違う熱心さであったのが驚きであった。少人数なのでなれ合いの甘えた雰囲気になりはしないかと当初は危ぶみもしたが、全員が集中してしっかりと取り組むことができた。特に心配していた Y 君と S さんについては、欠席は非常に多かつたのだが周囲がよくフォローし協力する中で主体的な活動を促す雰囲気生まれ、時には熱中して調べ物をする姿も見られ、グループ学習の利点が大いに生かされた結果となった。しかし、全体で八名という人数での授業は特殊であり「少数だからこそできた授業」を四十名の教室での授業に応用させることは難しい。四十名の教室で生徒たちの主体的な活動により創り上がっていくような授業を何とかして創造しなければならぬが、そのためには四十名の中でも散漫にならない集中力と、大勢の前で抵抗なく意見を発表できる雰囲気作りが大切であると思う。さらに、例えばティームティーチング等を取り入れることができれば、生徒の主体性をもっと生かしてゆけるように思う。

(2) 過程 I・II では現代語訳を作る段階で大変多くの時間を費やした。生徒たちは「何とか読み解いて内容を理解したい」という積極的な考えを持ち現代語訳に熱心に取り組ん

ではいたが、古典学習の圧巻は訳ではなくその後続く読みわいであり、訳はそのための補助でしかない。が、やはり時には現代語訳だけで満足してしまうことがあった。その一歩先(時代背景の中で作者の思いや人々の考え方)にまで考えを巡らそうと何とか努力する中で、「古典の作者も自分たちと同じ人間だ」と少しは感じ取ってくれたように思うが、過程 III 以降の、作者や登場人物に対する共感の持ち方に比べ浅いものがあつた。「現代語訳・知識の注入によるだけの理解」と「表現活動を取り入れ主体的に活動することによることも含めた理解」では、やはり後者がしっかりとした理解として身につくことが、実感として分かる結果となつた。

(3) 過程 IV・V では 8 名の生徒がそれぞれの感性によつて計二十三もの段を選択し読み進めたため、それぞれの段に対して適切で細かいフォローができたか疑問である。また、全ての生徒が読んだ段を全ての生徒が理解することをしなかつたがそれで良かったのかということも疑問である。全員に対する細かな指導を実現させるにはふさわしくない形であつたと思う。授業における個と全体とのバランスの置き方については今後の大きな課題であらうと考える。

(4) 全体として文法偏重の授業ではなかつたため、古典文学を「解説」ではなくより「文学」に近い形で読めたとはいえ、ただそれだけで終わってしまったように思う。生徒たちは辞書を片手に現代語訳に熱中していたが、それだけ

で語彙・文法事項が定着するわけではない。「古典はおもしろい」という思いから将来古典を紐解く（或いはそこまできかなくとも少しは意識する）動機付けができて、古典読解に必要な知識がある程度身に付いていなければ解いた紐を再び結んで放り投げてしまう可能性もある。

五 おわりに

「自分の力で古典に触れる」という、素地のない生徒にしては無謀な目標を掲げてしまったのだが、「授業をする」ではなく「一緒に授業を創る」という態度で臨むことが大切なのではないかと気づかされた。辞書を引く作業からすべて授業で共に取り組み進度も遅々としてなかなか多くの作品に触れることができなかつたが、自分の力で読み進めそのおもしろさを味わったのだ、という実感を、生徒たちは感じることでできたのではないかと考えている。

授業における表現活動の実践は私自身の大きな課題なのだが、「表現」と「古典」というのはつながりを見いだすのがなかなか難しい。しかし、自分の意見を主張したり説得力をもって述べたりすることが苦手な現代の生徒たちには、表現活動に慣れていく中でその力を少しずつ付けていってもらいたい。そのためにはたとえ「古典」でも利用することができるのではないか。そう考え、今回は朗読や群読ではなく自分自身の考えを表に出すために「新聞」という形をとってみたのだが、「枕草子」本文の表面的

な部分に触れることができても、それに対して自分がどんな考えを持ったのかについてはなかなか表現されずに終わってしまったことが残念であった。更に「新聞」という手段について研究し、利用するのによりふさわしい場や教材についても考えてゆきたい。

（前、島根県立浜田商業高等学校）
（現、島根県立津和野高等学校）